

平成29年度

応募件数 36件 助成件数 9件

団体名	所在地	活動内容の概要
函館湾岸価値創造プロジェクトチーム 会長 布村 重樹	函館市	【函館湾岸コンクリート物語2017】 市民や観光客の協力を活動に巻き込み、函館湾岸コンクリート物語に関連したコンテンツづくりとインタープリター養成ツールの製作をすることで、埋もれた価値を発見し、情報発信を共有し、さらにファンと一緒に活動する仲間を獲得する仕組みづくりに取り組む。具体的には、フォト・動画コンテストをとおし、カメラ・動画講座、聞き書き講座、まちあるき撮影ツアーの実施、およびインタープリター養成ガイドブックを製作する。
特定非営利活動法人 北海道エコビレッジ推進プロジェクト 理事長 坂本 純科	余市町	【余市の地域資源を活かした体験型観光の開発 ～ワインと羊を巡る冒険～】 余市町は、漁業や果樹生産で栄えた地帯であり、今はワイン特区として複数のワイナリーが人気を集めている。ニッカウキスキー工場の訪問客も多いが、一方で観光客の平均滞在時間はとても短く、余市の魅力は十分に伝わっていないのが現状である。主幹産業の農業も、後継者不足による耕作放棄地の増加が大きな問題となっている。そこで私たちは、ワインの搾り粕と規格外のフルーツなどを与えて育てるラム肉「ワインラム」を余市の新たな魅力として発信したい。ワインとワインラムの生産過程を公開講座やツアーなどのツーリズムのコンテンツとし、観光客に共生産者の意識を持たせ、余市に何度も足を運びたい仕組み作りと、さらには羊による持続可能な循環型農業や耕作放棄地管理のモデルを提案する。
特定非営利活動法人 ふらっと南幌 代表理事 濱田 暁生	南幌町	【「ほろむい七草・ミズゴケ再生保全活動」～地元若手農家グループと連携したミズゴケ増殖～】 当法人が南幌町より無償借受けして維持管理している「幌向原野用地」（3,099㎡）において、湿原環境の基盤となるミズゴケ自生地の確保をめざした「湿原環境ビオトープ」の整備・利活用活動を行う。併せて、当法人が連携を始めている地元若手農家グループメンバーの関心テーマである新たな農業の姿として、ミズゴケ栽培の事業化の可能性を検討するための試行を行う。これまで多く専門研究者の指導を受けつつ学習してきたプランターにおけるミズゴケ増殖技術をより大きな試験地へ展開するために、同用地の乾燥化現象を阻止するための流入水のコントロールと蔓延している立木（ヤチダモや柳類）の伐採と笹刈りなどの活動と当法人が別途確保してきたミズゴケの移植を行い、その状況を観察・記録しつつ研究を行う。
食と農の景勝地・十勝協議会 理事長 野村 文吾	帯広市	【農林水産省認定「食と農の景勝地・十勝」のPR事業】 当協議会は平成28年11月に農林水産省より「食と農の景勝地」認定をされ、外国人旅行者を対象とした十勝地域への誘客を目的にPR活動を開始した。道内へのインバウンド観光客が増加傾向にあり、更なるPRを行うべく地域内での取組の理解、認知度向上が目下の対策課題の中で、昨年開始された認定制度は、国内での認知度は低く、地域内でも当該認定及び取組みへの理解浸透がまだない状況である。このため、札幌駅前通地下歩行空間で十勝・帯広フェアへの出展を皮切りに、各種イベント等のPR活動を展開し、各イベント時にアンケート調査を行い「食と農の景勝地」認定の理解度、認知度を計測しつつ、今後のナショナルブランドとしての十勝地域全体の発展に寄与する活動を行う。
特定非営利活動法人 八剣山エコケータリング 理事長 フルスト ビアンカ	札幌市	【エコ発想と国内外交流による地域ブランド商品の開発】 エコケータリングの事業経験を元に、地域農産物や人的・自然的環境のネットワーク化を図るために、地域ブランド商品の開発を行い、八剣山周辺の地域資源の有効活用と地域魅力の発信力向上を図る。活動は「ことづくり」として、国内・海外の団体向け体験プログラム（近隣果樹園の規格外未使用果物・野菜の加工品づくりワークショップ）。「ものづくり」として、「もったいない」収穫隊を組織し、英語でも実施する省エネ型加工体験（乾燥・煮込み・煮沸）や土産加工品づくり（地元ジャム、ピクルス、ドライフルーツ入りシリアル等）を行う。また、観光バスによる旬の農産物体験プログラム（モニターワークショップ）も行う。こういった活動を行うためのスタッフ研修、地元農家でのオーツ麦栽培、乾燥機制作、体験物の屋根掛、英語・日本語資料作成、食品管理に関する加工場の申請を行う。また活動成果の検証を定山溪観光協会主催「雪三舞」催事における市場調査で行う。
なにいろ工房 代表 黒井 理恵	名寄市	【地元食材を活用したハーブティの開発と新しい観光ブランディング】 名寄市は日本に3か所しかない「薬用植物資源研究センター」がある。ここでは、日本北部の薬用植物の種を研究・保全し、センター・名寄市・農家が連携しながら国内製薬メーカーとも契約するなど、薬用植物は名寄の隠れた資源である。過去にもエゾウコギなどの薬用植物による商品開発が行われていた。今回は、研究者・農家・名寄大学（栄養学部）がいるという利点を生かし、名寄で育てた薬用植物や北方アイヌの食文化で利用されていた植物を中心に薬草茶（ハーブティ）の開発を行い、名寄の資源を活用した新商材をつくる。また、それをもとに商店街・飲食店を巻き込んだ薬膳料理の開発、近隣町村を巻き込んだ女性をターゲットにした「美と健康」をテーマに観光ブランディングを目指す。
特定非営利活動法人 しもかわ森林未来研究所 理事長 金子 一志	下川町	【「里山（生産空間）の価値化創造」のための活動事業】 現在、心の病やメンタルヘルスの問題を抱えている事業所は6割弱といわれ企業等への影響は計り知れない。こうした中、労働安全衛生法が改正され、労働者50人以上の事業場にメンタルヘルスチェックの実施が義務付けられた。今後はヘルスケアの義務化も予想される中、西洋医学的な対処療法一方で森林など里山（生産空間）の自然治癒力を活かした療法も新たな需要として確実に増大する。そこで、地域資源である新たな生産空間の価値化を図り、地域の活性化を図るため、単発的に行われている森林等を活用して森林セラピーやアニマルセラピーなどを医学的な効果を踏まえながら、パッケージ化し、実施活動へ向けた検証と商品化を目指す。
特定非営利活動法人 まち・川づくりサポートセンター 理事長 後藤 登	滝川市	【流域住民の夢をつなぐ かわたび！】 平成28年度は「ミスベリグ石狩川」の開催を通して、石狩川の魅力と役割、石狩川の文化を後世に伝える人づくりの必要性について共通理解をした。また、成果として、異業種間のネットワークを構築し、新たに川の魅力を普及する指導者を育成することができた。次のステップとして、平成29年度は、石狩川のブランド化に挑戦し、石狩川でしか味わえない自然・歴史・教育・遊び・食などの体験型教育・観光プログラムを企画し、石狩川ならではの河川利用について道内外に提案する。さらには、この取り組みを通して、河川管理者や流域圏の学校・企業・団体などの異業種との連携をさらに深め、世界に誇れるオンリーワンの石狩川を育む。
特定非営利活動法人 ゆうばり観光協会 理事長 小菅 覚	夕張市	【夕張シューパロダム周辺の観光に資する拠点づくりと各種活動】 夕張市からシューパロダムに沿って旭川市と富良野市へ国道が走るダム周辺は富良野声別道立自然公園の一角として多くの観光資源に満ちている。夕張市の東玄関口にあたり、夕張岳こざくらのかやSL三弦橋鉄道保存会、カヌー教室、ラフティングなどボランティア活動が盛んである。当協会は5月初旬から10月下旬にかけて旧シューパロダムインフォメーションセンターを活用してダムカレーやメロンジュースを販売提供、地域農産物直売所「あったカフェルト452」を運営し、そのトイレを観光客や地元ボランティア団体に利用していただく計画である。併せて周辺写真の展示と独自の観光パンフレットを制作して観光案内を行う。秋にはダムの紅葉祭りを開催して地域の顔としてまた拠点として活性化につなげていく。